

最優秀賞（神奈川県知事賞）

空気よりも、自分の声を

神奈川県立相模原中等教育学校 2年 坂本 咲紀



「普通はこうじゃない？」

この言葉を、私はこれまでに何度も耳にしてきました。何気ない一言に思えるかもしれません、私はこの言葉を聞いたびに、「その普通はいったい誰が決めているのだろう。」と疑問を感じます。私たちが何かを選ぶとき、自分の考えよりも普通に合わせてしまうことがあるのは、なぜでしょうか。

小学生の頃の出来事を今でもよく覚えています。クラスで学級レクリエーションの内容を決めることになり、最終的に「鬼ごっこ」と「ドッジボール」が候補に残りました。私はボールを投げたり受けたりするのが得意ではなかったので、鬼ごっこの方に手を挙げようと考えていました。ですが、投票が始まると、周りのほとんどがドッジボールに手を挙げました。「一人だけ鬼ごっこにしたら浮くかも。」と思い、気づけば自分の手もそっとドッジボール側に挙がっていました。

その時、前に座っていた男の子が「まあ、普通はドッジボールだよな。」とつぶやきました。その一言が胸に引っかかりました。後でよく考えてみると、私は「自分がどうしたいか」ではなく、「みんながどうしているか」で行動していたのです。もしあの時、正直に鬼ごっこに手を挙げていたら、「え、鬼ごっこ？」と笑われていたかもしれません。でも、心から楽しめたかもしれないし、自分の気持ちに正直でいられたと思います。

「普通」と言う言葉を辞書で調べると、「ごくありふれたこと。当たり前であること。」と書いてあります。しかし、どこまでがありふれていて、何が当たり前なのでしょうか。それは時代や国、文化、環境によって大きく変わるものです。

例えば、明治時代までの日本では、「男は外で働き、女は家庭を守る。」という考え方方が普通とされていました。ところが、今では女性も社会で活躍し、家庭のことを夫婦で分担していても違和感はありません。また、大正時代から昭和初期にかけては、左手で字を書くと「しつけが悪い。」と言われることがありました。学校では無理に右利きに直すように指導されることもあったと聞きます。しかし現在では、左利き用の道具も増え、左利きであることを否定されることは少なくなりました。昔の普通は、今では偏見とされることもあるのです。

このように、「普通」とは決して揺るがない価値観ではなく、その時代や集団の中で多数派が持っている考え方や行動のことなのだと気づかされます。つまり、普通は人がつくるものであり、それ自体が変わっていくものなのです。

日本の社会では特に、「まわりと同じであること」に安心感を抱く人が多いように感じます。「目立たないように」「はみ出さないように」と自然にふるまっている人が多く、違った意見や行動をとると、「空気が読めない」「普通じゃない」と言われることもあります。ですが、本当に大切なのは、みんなと同じでいることなのでしょうか。

確かに、協調性や思いやりは、人と関わる上で大切です。みんなが気持ちよく過ごすためには、ある程度のルールや共通の行動が必要なこともあります。ですが、「みんなと同じでなければいけない」という空気が強すぎると、本当の自分の考えや気持ちを出せなくなってしまいます。誰もが「浮くこと」を恐れ、言いたいことを飲み込んでしまう。そんな空気が、かえって人との距離を広げてしまうこともあると思います。

私はこれから、「普通」という言葉にとらわれすぎず、自分の気持ちや考えを大切にしたいと思います。あのレクリエーションの時の自分を思い出すと、今でも少し悔しい気持ちになります。ですが、その経験があったからこそ、「普通とは何か？」と考えるきっかけを得ることができました。もしこれからまた、同じような場面に出会ったときには、まわりの空気に流されず、自分の本当の気持ちを大切にしたいと思っています。人にはそれぞれ異なる経験や感じ方があるって、それがその人の普通のだと思います。

違いを認め合える社会、みんなが自分らしくいられる環境は、少しずつ私たちの手でつくっていけると信じています。私もその一步として、勇気を持って自分の意見を言い、自分にも他人にも正直でいられるような生き方をしていきたいです。